

第 48 回 東海スポーツ傷害研究会プログラム

@朝日大学西館講義室 2026/2/14 14:00-19:30

東海スポーツ傷害研究会

当番世話人 塚原 隆司

記

- 1) 日時 2026 年 2 月 14 日 (土) 14:00~19:30
- 2) 場所 朝日大学病院 西館講義室
岐阜県岐阜市橋本町 3 丁目 23 番地 [JR 岐阜駅下車西へ 500m / 徒歩 7 分]



- 3) 参加費 なし

- 発表者・座長の先生方へ
- 大変多くの演題をいただきましたので、円滑な演題進行にご協力をお願いいたします。

各演題：発表 5 分 / 質疑応答 3 分

1) ACL 再建術後 6 か月時点における K-STARTS 実施結果

ACL 再建術後 6 か月時点の 22 名に K-STARTS テストを実施した。身体機能は改善傾向を示した一方、心理面および動的アライメントの得点は低い傾向にあり、先行研究と同様の結果を示した。

鶴飼勝也 PT, 石原敏雄 PT, 藤本哲也 PT, 伊吹玲哉 PT, 北川祐衣 PT, 杉本遥平 PT, 高江洲悠太 PT, 村松孝一 Dr
はちや整形外科病院

2) 前十字靱帯再建術後早期は術前に比して歩行時前足部の推進力は回復するが、踵部衝撃吸収は遅延する

前十字靱帯再建術前と術後 3 ヶ月の歩行足底圧を解析した。術後、前足部荷重は有意に増大したが踵部に有意差を認めなかった。術後早期に蹴り出しは改善する一方、衝撃吸収機能の改善が乏しいことが示された。

宇野達也 PT 1), 若松信宏 PT 1), 牛山秀太郎 PT 1), 中島萌里 PT 1), 長坂知輝 PT 1), 金田慎也 PT 1), 松山太士 PT 1), 川島至 Dr 2)

1) 社会医療法人財団新和会八千代病院総合リハビリセンター 2) 社会医療法人財団新和会八千代病院整形外科

3) 陳旧性前十字靱帯損傷に対する高位脛骨骨切り術併用靱帯再建 2 例における術後早期歩行時左右対称性と心理状態

陳旧性前十字靱帯 (ACL) 損傷を伴う内側型変形性膝関節症に対し高位脛骨骨切り術併用 ACL 再建を行った 2 例で術前後の歩行解析と心理状態を評価した。術後 3 か月で歩行対称性は改善したが運動恐怖は残存した。若松信宏 PT 1), 宇野達也 PT 1), 牛山秀太郎 PT 1), 中島萌里 PT 1), 坂知輝 PT 1), 金田慎也 PT 1), 松山太士 PT 1), 川島至 Dr 2)

1) 社会医療法人財団新和会八千代病院総合リハビリセンター 2) 社会医療法人財団新和会八千代病院整形外科

4) 人工靱帯で補強した前十字靱帯修復術にて早期復帰可能であった高校バスケット選手の 1 例

高校スポーツは 3 年間限定であり、治療に時間がかかる傷害は出場機会を激減させる。ACL 損傷をしたものの半年後の大会出場を熱望された高校バスケット選手に、人工靱帯で補強した ACL 修復術を行い、早期復帰が可能であったので報告する。

平岩秀樹 Dr 1), 塚原隆司 Dr 1) 2), 河合亮輔 Dr 1), 武内優子 Dr 1), 酒井周 Dr 1), 宮永悠聖 Dr 1), 前田昌俊 Dr 1), 星野雄志 Dr 1), 今泉佳宣 Dr 1), 日下義章 Dr 1), 大友克之 Dr 1) 3)

1) 朝日大学病院整形外科 2) 朝日大学健康管理センター 3) 朝日大学

5) アスリートに生じた外側半月板中節横断裂に対し CrossTie-GripSuture で治療した 1 例

17 歳男性、ラグビー中に右膝を捻り受傷。MRI で外側半月板中節の辺縁部に到達する横断裂を認め、手術の方針とした。手術は断裂部に fibrin clot を充填し crosstie-gripsuture による縫合術を施行した。術後 3 か月でスポーツ再開、術後 6 か月で競技復帰が可能となり、本術式は半月板横断裂に対して有用な縫合方法だと考える。

太田恭平 Dr, 野崎正浩 Dr, 阿部健作 Dr, 花木俊太 Dr, 村上英樹 Dr
名古屋市立大学

6) Vリーグ男子バレーボール選手におけるジャンパー膝既往歴と身体的特徴の関連

男子バレーボール選手 18 名を対象に、ジャンパー膝既往歴と身体的特徴の関連を検討した。既往歴を有する群で

は左足関節背屈可動域が低値を示す傾向を認め、踏切脚への反復負荷との関連が示唆された。

榛地佑介 PT1), 田岡葵 PT1), 遠藤祐生, PT1) 小川達也, PT1) 墨田智紀 PT1), 神谷勇太 PT1), 瀬木翔平 PT1), 谷田川正浩 PT1), 平野雄大 PT1), 與田正樹 Dr2)

1) よだ整形外科リハビリテーション科 2) よだ整形外科

7) ユース年代サッカー選手におけるハムストリング肉離れ後の遠心性収縮筋力測定の有用性～再受傷をさせないための取り組み～

MRI 検査でハムストリング肉離れの修復が得られた後も違和感が残存した選手に対し、等速性遠心性収縮による筋力測定で筋力差を定量化し、回復程度に応じて競技負荷を調整することで安全に競技復帰した症例を報告する。田口毅 PT1), 山賀寛 Dr2), 山賀篤 Dr2), 桑坪憲史 PT1), 河野公昭 PT1), 村橋喜代久 柔整 1), 勇島要 PT1)

野田英伯 PT1), 小寺将弘 PT1), 牛飼健翔 スポーツ指導者 1)

1) やまが整形外科リハビリテーション科 2) やまが整形外科

8) 骨化性筋炎を生じたラグビー選手に対し拡散型圧力波が有効であった一例

ラグビー選手の大腿四頭筋に発生した骨化性筋炎 (MO) に対し拡散型圧力波 (RPW) 治療を全 4 回実施。治療後、疼痛と柔軟性が改善し、早期スポーツ復帰が可能となった

小川達也 PT1), 田岡葵 PT1), 與田正樹 Dr2)

1) よだ整形外科リハビリテーション科 2) よだ整形外科

9) 鏡視下股関節唇修復術後のプロゴルファーに発生した股関節周囲の重だるさへの対応

本症例は、競技復帰後にトレーニング量の増大に伴い股関節周囲に重だるさが出現した。理学所見、エコー所見と運動療法および経過から、膝伸展機構の機能不全が関与していると判断した。

岡西尚人 PT, 上川慎太郎 PT, 岡田康平 PT, 早川智広 PT, 小田切凌真 PT, 福島夏音 PT, 森弘明 PT, 加藤哲弘 Dr 平針かとう整形外科スポーツクリニック

10) 立位時の足関節肢位変化が Kager' sfatpad の組織弾性に与える影響

立位時の荷重負荷が Kager' sfatpad の組織弾性に影響し、特にアキレス腱パートがより大きな変化を示すことが明らかとなった。本研究では、先行研究をもとに足関節肢位変化が同組織弾性に及ぼす影響を検討した。

二村英憲 PT1), 中川宏樹 PT1), 二村涼 PT1), 石田勝 PT1), 杉本勝正 Dr2), 林典雄 PT3)

1) 名古屋スポーツクリニックリハビリテーション科 2) 名古屋スポーツクリニック整形外科

3) 運動器機能解剖学研究所

S3 上肢/メディカルチェック

座長 平岩秀樹 朝日大学病院整形外科

15:20-16:00

11) 大学水泳選手における泳法の違いが肩関節関連身体特性に与える影響

大学水泳選手の肩関節痛予防を目的に、胸椎後弯角度・上肢バランス・胸郭拡張性を測定し、泳法別に姿勢や上肢機能、胸郭可動性の違いを検証したため、その結果を報告する。

清水怜有 PT1), 坂田淳 PT1), 村田祐樹 AT1), 松澤寛大 PT1), 内田智也 PT1), 高橋達也 Dr2), 酒井忠博 Dr2)

1) トヨタ記念病院トヨタアスリートサポートセンター 2) トヨタ記念病院整形外科

12) 小学生野球選手における対立動作機能と肘外反ストレス時内側裂隙開大差の検討

先行研究から対立動作不良群は投球障害肘に多くみられると報告されている。本研究では小学生野球選手を対象

に、対立動作不良群と良好群で外反ストレス時の裂隙開大差を比較し、不良群における肘内側不安定性を検討した。
嶋田祥磨 AT, 銭田良博 PT, 小林航太 PT
株式会社ゼニタ

13) 野球メディカルチェックにおけるバランス検査の有用性

投球動作は下肢、体幹、上肢が協調する複雑な全身運動である。今回中学野球選手を対象にメディカルチェックを実施し、バランス能力の評価として Y バランステストを実施した。そこで得られた見解について報告する。
高橋昂平 PT1), 神田将大その他 1), 松下千佳代 PT1), 守矢高瀬 PT1), 坂巻裕貴 PT1), 加藤江美 PT1), 中村里菜 PT1), 溝口藍 1), 榎政和 PT1), 山田謙吾 Dr1), 松尾真吾 PT2)
1) やまだ整形外科リハビリクリニック 2) 日本福祉大学健康科学部リハビリテーション学科

14) 育成年代のサッカー選手における体組成と身体機能の関連性

“男子高校サッカー選手において、BMI や体脂肪率、骨格筋指数など体組成がアジリティやスプリント、跳力と関連し、とくに位相角はスプリント能力と跳躍力の有用な指標となる可能性があることが明らかになった。
齊藤祐樹 Dr1), 高松晃 Dr2), 三田有紀子その他 3), 山口翔太その他 4), 鈴木望人 Dr1), 寺部健哉 Dr1)
浅井秀司 Dr1), 今釜史郎 Dr1)
1) 名古屋大学医学部附属病院整形外科/リウマチ学 2) 吉田整形外科あいちスポーツクリニック
3) 椋山女学園大学生生活科学部管理栄養学科 4) 株式会社 S-CADE

15) 中学生サッカークラブにおいて実施したメディカルチェックの報告（8 年間）と、腰椎分離症および Osgood-Schlatter 病の発症率と身体特性について

当院では中学生サッカークラブを対象にメディカルチェックを実施している。今回、8 年間のメディカルチェックの結果と、腰椎分離症および Osgood-Schlatter 病の発症率と身体特性について報告する。
寺師望 PT, 大須賀友晃 Dr, 若林英希 PT, 北川和弥 PT, 森谷裕司その他, 畑川猛彦 PT, 泉裕斗 PT
医療法人社団大須賀医院おおすが整形外科

— 休憩（10 分） —

S4 活動報告・メディカルチェック 座長 與田正樹 よだ整形外科

16:10-16:50

16) 女子社会人アマチュアサッカーチームにおける 3 年間（2022 年～2024 年）の傷害発生状況

国内の女子サッカーにおけるこれまでの傷害調査対象は学生が中心であり、エリート・社会人アマチュア選手の報告は乏しい。本研究は、社会人アマチュアチームを対象に 3 年間の傷害調査を実施し、実態を明らかにした。
金澤毅 AT, 武内泉樹 PT, 平野佳代子 PT, 水谷将和 PT, 吉原圭祐 PT, 柴田智仁 PT, 井戸田大 Dr
井戸田整形外科名駅スポーツクリニック

17) ブラジリアン柔術大会世界大会でのトレーナーサポートにおける活動報告～エコーでレッドフラッグを疑って整形外科医への紹介を行うことが重要～

2024 年 9 月に愛知県で、ブラジリアン柔術大会世界大会が開催された際の、ゼニタスタッフの PT・AT・鍼灸師によるトレーナー活動を報告する。エコーをフル活用し、競技復帰の適応と禁忌（レッドフラッグ）を見極める。
銭田博 PT, 嶋田祥磨 PT, 小林航太 PT
株式会社ゼニタ

18) 社会人サッカーチームにおける肉離れの発生状況と身体組成の特徴について

サッカー競技における下肢傷害の中でも肉離れの発生頻度が高いことが知られている。今回、当院がメディカルサポートする社会人サッカーチームにおける肉離れの発生状況と身体組成の特徴について報告する。

北川和弥 PT, 大須賀友晃 Dr, 森谷裕司 その他, 畑川猛彦 PT, 若林英希 PT, 寺師望 PT, 竹内文恵 PT

医療法人社団大須賀医院 おおすが整形外科

19) プロ契約に至る選手の受傷傾向: 育成期の障害・外傷はリスクか経験か

国内プロ育成選手の調査で、プロ契約群は非契約群より受傷件数が有意に多かったが、離脱日数に差はなかった。受傷頻度は活動量の反映と推察され、長期離脱時も焦らず段階的復帰を促す重要性が示唆された。

水野 隆文 Dr1), 石塚 真哉 Dr1), 杉本 遼介 Dr1), 吉田 和樹 Dr1), 坂口 健史 Dr1), 高橋 達也 Dr2), 瀧 圭介 Dr3), 酒井 忠博 Dr2), 近藤 精司 Dr4), 清水 卓也 Dr5), 今釜 史郎 Dr1)

1) 名古屋大学整形外科 2) トヨタ記念病院整形外科 3) トヨタスポーツセンター 4) 至学館大学
5) 中京大学

20) 腹囲の縮小は体幹の回旋トルク発揮を阻害する

腹囲を縮小させる手技が、腹圧と体幹回旋トルク発生に与える影響を調査した。その結果、腹囲の縮小は腹圧と体幹回旋トルク発生を抑制した。したがって、体幹に回旋ストレスが加わる場面での腹囲縮小は推奨できない。

清水卓也 Dr1) 木村明日佳 大学院生 2)

1) 中京大学保健センター 2) 中京大学スポーツ科学研究科

S4 腰椎 座長 深谷泰士 あつたの杜整形外科スポーツクリニック

16:50-17:30

21 大学ハイレベル選手と成長期の片側性新鮮腰椎分離症における初診時の特徴の比較検討

われわれ昨年、本会にて大学ハイレベル選手の新鮮腰椎分離症（ALS）は外傷契機の発症が多い傾向であることを報告した。本研究では、外傷契機の割合と初診時の身体機能として分離側のハムストリング、腸腰筋タイトネスおよび胸郭回旋可動域を成長期 ALS と比較した。結果、外傷契機は大学選手に有意に多く存在したが（ $p=0.046$ ）、身体機能に有意差はなかった。よって、発症メカニズムは患者特性で異なる可能性がある。

松澤寛大 PT1), 高橋達也 Dr1) 2), 内田智也 PT1), 坂田淳 PT1), 酒井忠博 Dr1) 2)

1) トヨタ記念病院 トヨタアスリートサポートセンター 2) トヨタ記念病院整形外科

22) 高校サッカー選手における腰椎分離症発症危険因子の前向きコホート研究-産学連携プロジェクト

NagoyaSTRIVESTudy-

高校男子サッカー選手 116 名を 1 年間前向きに追跡し、腰椎分離症の発症危険因子を検討した。右股関節内旋制限と高い持久力が独立した予測因子であり、可動性不均衡と競技負荷の関与が示唆された。

高松晃 Dr1), 齊藤祐樹 Dr2), 三田有紀子 その他 3), 山口翔太 その他 4), 今釜史郎 Dr2)

1) 吉田整形外科 あいちスポーツクリニック 2) 名古屋大学整形外科/リウマチ学

3) 椋山女学園大学 生活科学部 4) S-CADE Corporation

23) 骨癒合阻害因子を含む初期腰椎分離症に対しての軟性コルセットによる治療成績～骨癒合率に着目して～

今回、我々は骨癒合阻害因子を含む初期腰椎分離症（対側偽関節を除く）に対し軟性コルセットで治療を完遂した 119 例についての骨癒合率を検討した。骨癒合が期待できる症例も多く、今後のコルセット選択の一助になる

ことが示唆された。

戸塚健二 PT1),小早川晃範 Dr2),小林良充 Dr3),尾藤晴彦 Dr1)

1)浜松市リハビリテーション病院 2)小早川整形リウマチクリニック 3)聖隷浜松病院

24)腰椎椎体間固定術の低侵襲化

～FullEndoscopicTrans-Kambin'sLumbarInterbodyFusion(Fullendo-KLIF)～

近年,経椎間孔アプローチによる全内視鏡下脊椎手術が普及し,固定術にも応用され低侵襲化が進んでいる.FullendoKLIF は背筋群・椎間関節を温存できる低侵襲固定術であり,手技の概略,術後成績について報告する。

八木清 Dr,鈴木伸幸 Dr,加藤賢治 Dr,末永聖悟 Dr,村上英樹 Dr

名古屋市立大学

25)学生スポーツ選手の腰椎椎間板ヘルニアに対する経椎間孔的全内視鏡下ヘルニア摘出手術

(transforaminalfull-endoscopicdiscectomy:TF-FED)

TF-FED は 8mm の皮切で局所麻酔下に施行可能な低侵襲手技で,後方支持組織を温存でき,早期競技復帰に有用とされる.当院における学生スポーツ選手の術後成績および競技復帰状況を報告する。

八木清 Dr,鈴木伸幸 Dr,加藤賢治 Dr,末永聖悟 Dr,村上英樹 Dr

名古屋市立大学

—休憩(10分)—

特別セッション ‘それぞれの立場からの体幹のコンディショニング’

座長 塚原隆司 朝日大学健康管理センター

特別講演1 PTの立場から 坂田淳 PT トヨタ記念病院トヨタアスリートサポートセンター

17:40-18:10

特別講演2 医師の立場から 清水卓也 Dr 中京大学保健センター

18:10-19:10

討論 19:10-19:30